

# 植物学者郡場寛博士の履歴（2）－昭南植物園－<sup>1)</sup>

山内 智<sup>2)</sup>

On the Record of a Botanist Dr. Kwan Koriba.

(2) The Shonan Botanical Gardens

Satoshi YAMAUCHI

キーワード：郡場寛，植物生理学，昭南植物園

## 1. はじめに

植物生理・生態学者である郡場寛博士（1882-1957）は、青森市出身で東京帝国大学理科大学を卒業後、東京帝国大学、東北帝国大学農科大学、京都帝国大学で教鞭を執られた。戦後に、弘前大学学長に就任し、国を代表する学術関係の委員や国内外の調査・研究にも尽力した。ご自宅に保管されていた郡場寛に関わる資料は、平成14年に一括して御子息から青森県立郷土館に寄附された。

郡場寛は、植物生理学に関する先駆者でありその研究は高く評価されている。詳しい経歴については芦田穰治（1943）、中沢潤（1953）、郡場寛先生遺稿集刊行会（1958）、山内智（2009）等にまとめられている。

郡場寛は京都帝国大学理学部長を最後に退官し、その後間もなく、戦時中、昭南特別市（現シンガポール）にある昭南植物園長に就任し、多くの文化財を分散から守ったことは高い評価を得ている（E.J.H.Cornor, 1946）。

当時の調査・研究を記録した3冊のノート等が寄附資料の中にあり、今回これらの資料を元に昭南特別市での研究内容の一部や、その活動を知ることができた。

青森県立郷土館に一括して資料を寄附いただき、多くのご助言いただいた郡場是行氏、郡場央基氏、資料の寄附にご尽力いただき、本論の査読とご教示をいただいた弘前大学医療技術短期大学部名誉教授千葉滋男氏、資料整理に協力を惜しまなかった青森県立郷土館福地麻美氏、福士たか子氏、資料掲載にご助言をいただいた青森県知的財産支援センター並びに関係各位に心から感謝する。

## 2. 軍歴

郡場寛も、全国民に実施されていた徴兵検査を受けている。その結果「丙種合格、兵役免除」となった。その理由は「当時の青年は学籍にあると満28歳までは兵役は延期された。大学を卒業すると、体格のよい人は大抵

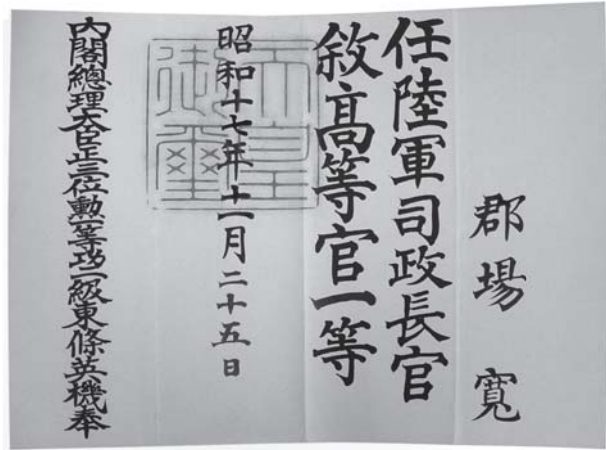


図1. 陸軍司政長官辞令

1年志願兵となり、それを終えてから社会の人となるのが多かった。但し私は銃の引金を引く指がよくきかなかつたので丙種合格兵役免除となり、大学院卒業まで学習を続けることができた。」（郡場寛，1954）。「懲役検査のころは、いたって健康だったが、子供の時指ヒョウソウにかかったので指に故障を来し丙種になった。」（郡場寛，1957）。徴兵検査は受けたものの、昭南特別市で陸軍司政長官となるまでは軍人にも軍属にも就くことはなかった。

## 3. 京都帝国大学退官前後

郡場寛は、昭和17（1942）年9月26日「依願免本官」（内閣総理大臣発令）になり、同年11月25日には「任陸軍司政長官、叙高等官一等」の辞令が内閣総理大臣から発令された（図1）。このことは陸軍司政長官に就任するために退官したのではなく、依願退職である。当時の退職については法律や学内規定はなく、申し合わせに

1) 郡場寛博士コレクションに関する調査研究（2）、青森県の自然誌に関する調査研究（17）

2) 青森県立郷土館副参事（〒030-0802 青森市本町2丁目8-14）

よるものであった。京都帝国大学では大正 12 (1923) 年 3 月の「在職教授退職ニ関スル申合」で満六十歳定年と定めている (嘉戸一将, 2001)。郡場寛もこの申し合わせに従って依頼し退職が認められた。

昭南特別市への赴任の経緯は「12 月に入って郡場寛博士と羽根田弥太博士という科学者が陸軍司政長官及び陸軍司政官として昭南島に派遣されてきた。先に来昭していた江崎, 本田, 大塚の三教授の報告で, 学術研究会議はシンガポールの博物館を正式に研究機関として認めることになり, その結果, 両博士が学術研究会議の推薦で昭南島の土を踏むことになったのであった。」(戸川幸夫, 1990)。当時, 陸軍の軍属には陸軍司政長官, 陸軍司政官, 陸軍技師, 陸軍通訳官, 陸軍属, 陸軍通訳生, 陸軍技師などがあつた。

昭南島で苦楽を共にする羽根田弥太は発光生物の専門家で, 戦後, 横須賀市自然・人文博物館館長に就任した著名な研究者である。郡場寛は植物学, 羽根田弥太は動物学としての推挙であつた。

#### 4. 昭南特別市赴任

昭和 17 年 12 月 1 日 (青森局消印), 文部省から青森市柳町の実家に「キカ ナンボウヘ フニンウチアワセノタメ 一二ツキ五ヒゴゼン九ジ リクグンセウグンムカヘ シュツトウアリタシ (貴下, 南方へ赴任打ち合わせのため, 12 月 5 日午前 9 時, 陸軍省軍務課に出頭ありたし)」の電報が届いた。この時, 郡場寛は京都の自宅ではなく青森の実家に滞在していたと思われる。同年 12 月 5 日, 陸軍省軍務局軍務課から旅行券と身分証明書が発行された。

赴任の月日等に関しては郡場寛先生遺稿集 (同刊行会, 1958) に詳しく, 出発は「昭和 17 年 12 月 21 日福岡雁ノ巣飛行場発, 同日広東着, 12 月 22 日昭南着」と記述されている。寄附資料として残された旅行券によると所属部隊・官氏名: 富部隊付陸軍司政長官郡場寛, 旅行目的: 赴任ノ為, 旅行予定経路: 東京-昭南, 旅行予定期間: 約 1 週間, 旅費支出科目: 臨時軍事費である。更に, 事變地内食料: 12 月 21 日夕食, 22 日昼食, 事變地内宿泊料: 12 月 21・22 日一泊とある。検印が「福岡県・昭和 17 年 12 月 21 日」, 「台北飛行場出発・昭和 17 年 12 月 21 日 (台北州台北北警察署)」の 2 つのスタンプが押されている。これらのことから, 12 月 21 日福岡県雁ノ巣飛行場発, 台北飛行場経由, 広東着 (宿泊), 12 月 22 日広東発, 昭南着の陸軍軍用定期航空の空路で赴任したと考えられる。また, 大日本航空株式会社の「昭南行」(スタンプ印)と明記された荷物引換券から, その手荷物は 2 個 (手書き) であつた。

昭南の飛行場に出迎えたアルフォンソ青年 (1972 年当時シンガポール植物園長) によると「やがて, 到着した軍用機のタラップを降りはじめた郡場先生が, 軍刀とコウモリ傘を紐でぐるぐる巻きにして小脇にかかえ, 次

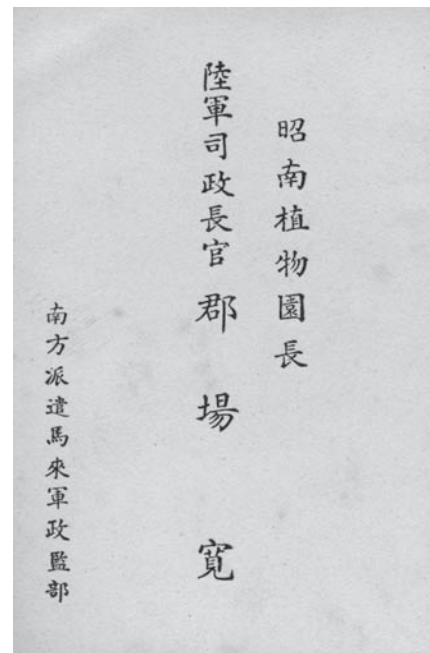


図 2. 名刺

いで, その一束になつた軍刀とコウモリ傘をステッキ代わりにしだしたのを見たアルフォンソ青年は, これは人間味のある立派な学者がおいでになつたと, ほっと胸をなでおろした。」(千葉滋男, 1984) とその時の様子を回想している。昭南特別市での陸軍司政長官・昭南植物園長としての生活がはじまつた (図 2)。

赴任時の宿舍は, 同時期赴任した羽根田弥太と最初は植物園内の旧園長宿舍に約半年間一緒に住まい, 羽根田弥太は引っ越した。郡場寛は人数の多いイギリス人研究者こそ広い園長宿舍を使うべきとして彼らにゆずり, 自分は一人身であるのでこれで十分と, せまい一般職員宿舍に住居し続けた。引き揚げまで同じ宿舍に住居した。さらに, 植物園内では「司政長官の軍服を着ていた。だが, 軍刀は公式の席に出るとき以外はつけなかった。」「教授は二階の, 事務室の上の静かな研究室を好み, ほとんどそこで研究した。」(E.J.H.コーナー, 1982) と当時の様子を知ることができる。

#### 5. 昭南植物園

##### (1) 昭南植物園での任務

昭南植物園は, もともとシンガポール植物園と呼ばれ, 当時「シンガポール市の中心より西北 5 軒を距てたるタングリン街にある。其面積は 100 エーカー, 海拔 200 呎, 低き丘陵地を占めて居る。」(田中館秀三, 1944) と広大な敷地に原生林, 池, 世界各地から移植した植物, 更に研究室, 作業小屋, 宿泊施設等が配置されていた。占領後, 植物園は「昭南島植物園」と呼ばれていたがその後「昭南植物園」と改名された (田中館秀三, 1944)。当時, 昭南植物園, 昭南博物館ではその保存管理に日本人と英国人の研究者が一緒になって取り組んでいた (E.J.H. コーナー, 1982)。

郡場寛が、昭南特別市に着いた昭和 17 年 12 月 22 日から昭南植物園長の辞令が出た翌年 4 月 19 日までの間の約 5 ヶ月間、辞令が発令されなかった。その間の事情は不明であった。その就任と職種に関して、寄附資料の中に郡場寛直筆（郡場是行氏筆跡確認）の「馬來に於ける事務に関する覚書」と表題のある下書きと思われる原稿が 1 枚ある。それには「馬來に於ける小生の任務は任命當初より昭南植物園長にて内定し居たり。右は昭和 17 年 7 月科学審議会にて羽田総長委員の一人として其議に興り決定致し小生に傳へたるものなり。而して同 11 月 25 日司政長官に任命、12 月 22 日昭南着、直ちに植物園に参り事務及研究に従事せり、但し陸軍省と馬來軍政監部とは事務の遅延行違其他の事あり、當時、馬來軍政監部顧問徳川義親侯は田中館秀三氏の後を承け、昭南博物館長及昭南植物園長を兼ね居たり、尤も是は辞令に由らず、戦争後の口頭任命なりしに由り、小生に對しては正式官制決定後発令致すべしとの事にて、翌昭和 18 年 4 月 15 日、植物園が昭南特別市の管轄に入りたる直後発令せられたり、其迄は空位に居るを避け馬來軍政監部付、総務部勤務の名義にて植物園長の実務を擔當し、終戦當時に及べり。（原文のまま）」と赴任当時の事情が書かれている。

当時の南方軍軍政総監部には南方軍軍政総監部執務規定（昭和 17 年 7 月 25 日制定）により総務部、經濟部、交通部、厚生部、調査部、敵産管理部の 6 部門があった（太田弘毅、1978）。陸軍司政長官である郡場寛は、諸調査、学術を担当する調査部ではなく総務部であった。

#### （2）昭南植物園での調査研究

郡場寛の昭南島での調査研究は、元シンガポール植物園長 R.E.Holtum と同副園長で熱帯植物の権威である E.J.H.Corner をはじめとする元植物園職員を、占領下において捕虜としてではなく共同研究者として一緒に調査し議論し研究を進めた。特に E.J.H.Corner の協力無くして調査研究は進展しなかった。この当時のことは E.J.H. コーナー（1982）によって詳しく述べられている。

昭南植物園勤務で、まず行ったことは「植物園の事務

や管理、図書の内容、標本、植物園の科学上の政策を学びはじめた。」（E.J.H.コーナー、1982）。そして調査研究では「日曜日の午前中は、郡場教授、羽根田博士、パートとホルタムと私の 5 人は 2 台の車に分乗して、森林の保存状態を調べ、木の生育を観察するため、シンガポール島内を隅々まで走り回った。」（E.J.H.コーナー、1982）と調査のことが語られている。しかし、研究テーマの一つは「マラヤの木の発育習性」（E.J.H.コーナー、1982）であるが、植物園内での研究内容について知る資料は少ない。

終戦後、収容所に抑留される時、「2 個の荷物をコーナー博士に預けたこと、そのうち 1 個は学者の生命ともいえる研究論文や研究ノート類で、もうひとつは衣類等の身の回り品であった。」（千葉滋男、1984）。この鞆はその後郡場寛に返却された。当館に寄附された資料の中に、この時の研究ノート 3 冊（図 3）と鞆が 1 点が含まれている（図 4）。尚、預けられた研究論文は、その後シンガポールから刊行（Koriba、1958）されたが、刊行年は本人他界の翌年で、遺稿となった。また、鞆は革製で名札入れには昭南植物園長の名刺に手書きで「京都帝大理学部植物学教室」（荷物が引揚げ時に紛失した時のことを考えての記入と思われる。）と付記されて入っており、更に 1941 年の英新聞 SUNDAY EXPRESS が中に入っていた。このことから、これはコーナー博士に預けた鞆と判断された。

今回確認された研究ノートは 3 冊で、ノートの表紙や装飾等から昭南特別市に赴任してから購入されたものと思われる。このノートには何枚かの地図と、植物園の地図付きパンフレットが挟まれていた。

戦時中でもあり、当時すでに有用植物に関わる調査等が行われていたと推測される。この地図の中にガリ版刷りの「昭南植物園内有用植物点在図（昭和 17 年 9 月現在）」があり、地図に番号が 70 まで付けられ、余白に鉛筆書きで 1～70 までの番号順に植物名が書かれている。郡場寛の赴任（昭和 17 年 12 月 21 日）以前の植物園内で、有用植物調査が行われていたことを知る資料である。

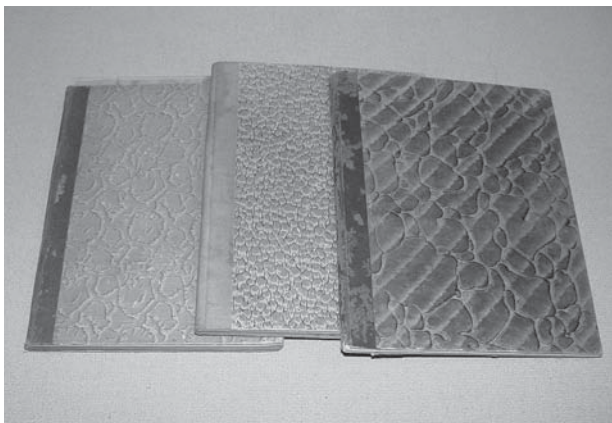


図 3. 研究ノート 3 冊



図 4. 鞆（革製、30×30×80cm）

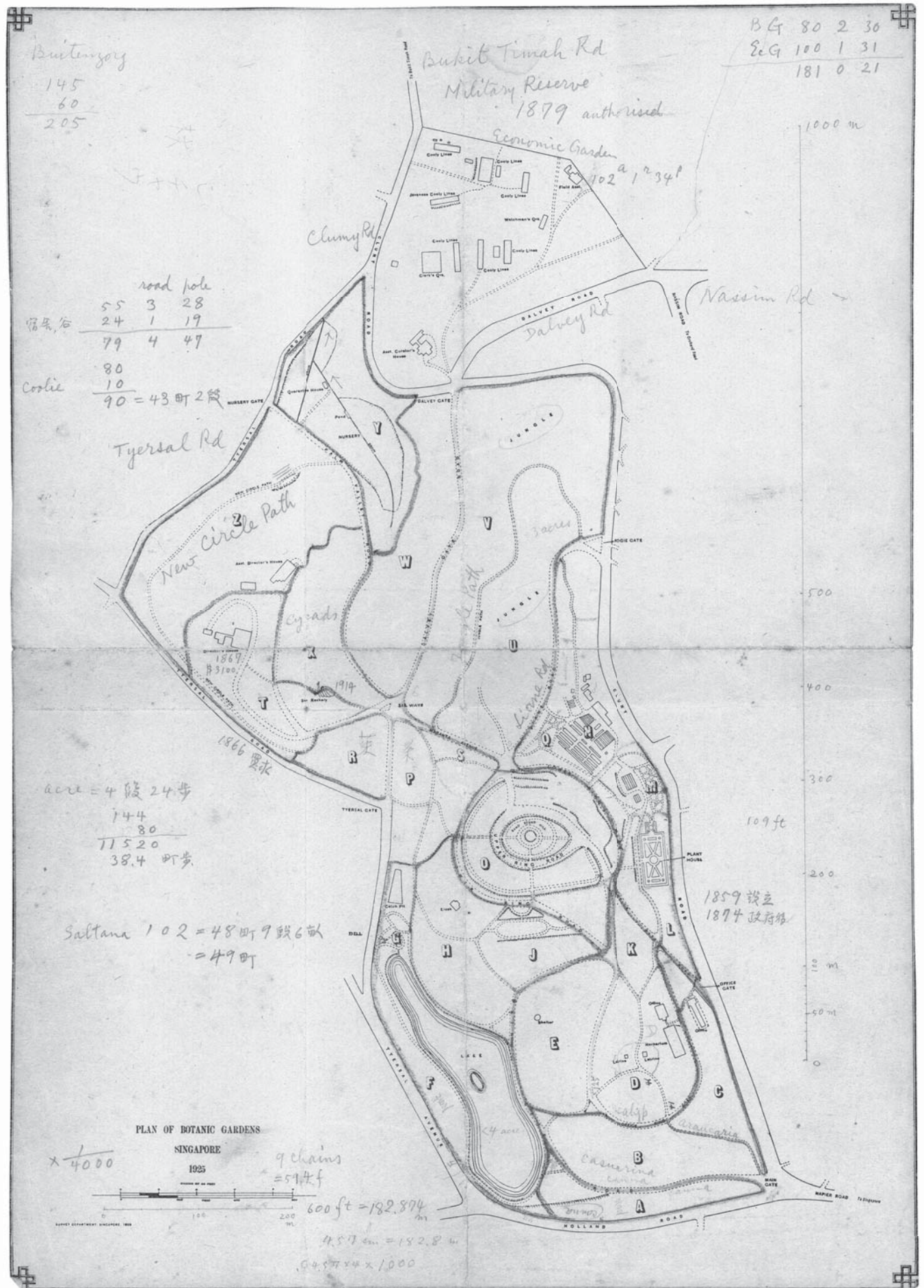


図5. 地図 (植物園・郡場寛メモ付き)

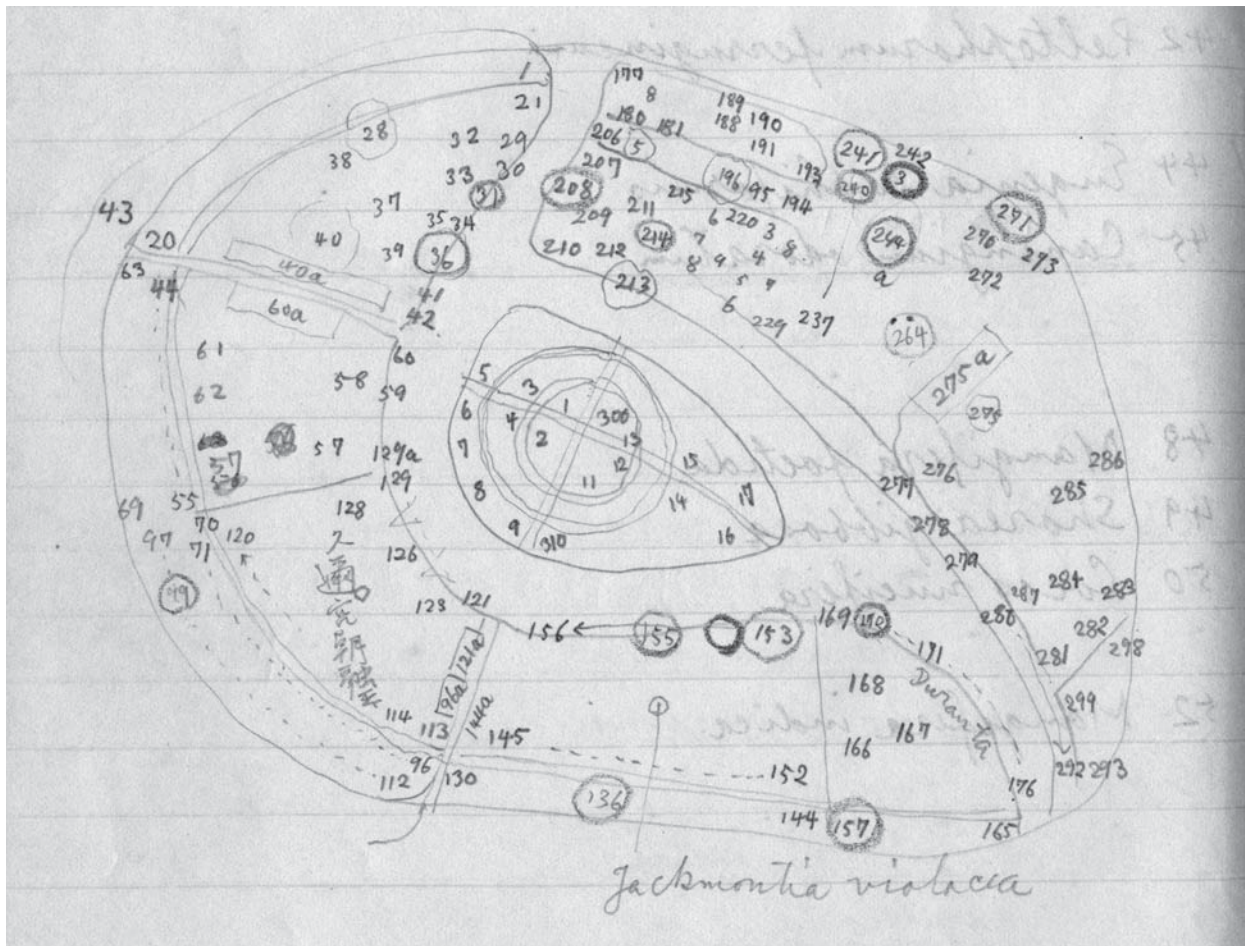


図6. 調査ノートから 区分O (野外音楽堂付近)

この他に植物園の案内パンフレット「SHORT GUIDE TO THE BOTANIC GARDENS, SINGAPORE」が挟まれていた。その裏には植物園の地図「PLAN OF BOTANIC GARDENS SINGAPORE (1925)」が書かれて A ~ Z (I, U, V は欠番) の区分符号が入っている (図5)。

郡場寛の昭南植物園での調査研究では、上記のパンフレット地図の区分符号がそのまま使われている。研究ノートは上記の地図の区分符号ごとに、調査植物地点番号・学名と、その番号の植物の形態などの特記事項記載がある。更に、当該区分地区の地図が調査植物地点番号付きで書かれていて、記録された番号・学名の場所がわかるようになっている (図6)。ペン書きで学名等が、鉛筆書きで特記事項、訂正、調査植物地点で複数種類が確認された時の追加等が書かれている。1冊目は区分A~Hそして区分別総数一覧表、昭南神社移植記録、植物用語が書かれている。2冊目は区分J~W, 3冊目は区分X~Zそして種類を上げて植物の特徴が絵入りで記載されている。但し、隣接するNQ, PSは2区分一緒にして調査している。園内をくまなく調査し、特徴的な植物の形態、生育等について E.J.H.Cornier と毎日のように議論し (E.J.H.コーナー, 1982), 調査研究が進められていたことが伺える資料である。なお、E.J.H.コーナー (1982) によると、植物園は「熱帯から亜熱帯にかけての三千種もの樹木」が見られたと言う。

調査では、昭南植物園の樹木を中心に調査地点を選定したようであるが、その選定基準については明示されていない。研究ノートから一覧表 (表1) を作成してみた。全体をしてみると調査植物地点数 3,190 地点を指定し、その中で種類が確認できたのは 2,677 地点 (全体の 83.9%), 種類の確認ができなかったのは 513 地点 (16.1%) と、指定した地点の 8 割強を確認できたことになる。更に、植物種類数は、調査植物地点で複数の種類確認も全て統計に含めて算定した。植物の種類数は 1,278 種類にも及びその中でも属までは 204 種類、種まで確認できたのが 1,074 種類であった。

区分毎に見てみると、調査植物地点数で多いのは区分Z 371 地点、種類確認地点 353 点 (該当区分全体の 95.1%), 続いて区分O 319 地点、種類確認地点は 311 地点 (97.5%) であった。調査植物地点数が最も少なかったのは区分Mで 31 地点、種類確認地点 14 点 (45.2%) と種類確認地点も半数に達していない。また、調査植物地点全ての種類が確認できたのは区分A (67 地点)、区分B (134 地点) であった。植物の種類数では、多いのは調査地点と同じで区分Z (239 種類)、区分O (237 種類) で、少ないのは区分M (13 種類) であった。この中でも特に野外音楽堂付近 (区分O) で記録された種類の 96.6% までが種レベルまで確認されている。

植物園内の全ての植物を調査植物地点にしたわけでは

表1. 昭南植物園植物研究ノート記載総計一覧

区分	調査植物地点			植物種類数		
	総地点数	種類確認地点数	種類未確認地点数	総数	(属. まで)	(種まで)
A	67	67	0	58	3	55
B	134	134	0	94	18	76
C	125	106	19	89	3	86
D	217	214	3	155	12	143
E	76	71	5	54	4	50
F	115	99	16	76	12	64
G	103	62	41	24	8	16
H	166	158	8	113	14	99
J	224	206	18	143	64	79
K	174 <sup>1)</sup>	53	121	37	4	33
L	76	64	12	39	11	28
M	31 <sup>2)</sup>	14	17	13	5	8
NQ	60	41	19	38	3	35
O	319	311	8	237	8	229
PS	86	68	18	28	1	27
R	61	46	15	18	5	13
T	109	100	9	72	12	60
W	268	225	43	93	20	73
X	197	173	24	89	8	81
Y	211	112	99	49	31	18
Z	371 <sup>3)</sup>	353	18	239	40	199
全体	3, 190	2, 677	513	1, 278	204	1, 074

\* 区域 I, U, V は研究ノートに記入なし

1) 細分 I, II に区分. 調査記載及び地図の最終番号 47, 127 で合計 174 点, ノートの総数一覧表には 168 点. 前記 174 点を K として記入した

2) ノートの総数一覧表は空欄, 調査記載の最終番号は 26, 地図の最終番号 31. 地図番号 31 点とした.

3) ノートの総数一覧表は空欄, 調査記載の最終番号 371.

ないが, 世界各地の植物, 特に熱帯植物を研究するには最適地であったと思われる.

確認された種類について見てみると, 最も多く確認された植物はテンブス (*Fagraea fragrans*) と呼ばれる常緑高木で植物園の 44 地点 (区分 C, E, F, G, H, J, PS, R, T, Z) で確認されている. シンガポールの 5 ドル紙幣にも印刷されたり, 当地の公園や街路樹としてよく見られる植物である. この植物は区分 F, G, R では最優占種になっている.

種類まで確認されていないがタケ連の一つ Bamboo と書かれている地点も 30 地点 (区分 G, O, Y, Z) あり, 特に区分 Y, Z に集中して多い. 研究ノートに記載された Bamboo は地下茎で生育する日本等で見られるタケ・ササと異なり, 株立ちになるもので熱帯地方に分布

する.

熱帯の花木の代表であるハイビスカス *Hibiscus* (アオイ科フヨウ属) も植物園から多く確認されている. 特に区分 J からは 63 地点, O から 2 地点, G, H, Z から各 1 地点記録されている. 本種は野生種の他に園芸種もたくさん作られており, 花の大きさ, 形, 色から多くの品種が知られている. 調査ノートには *Hibiscus* 1,2,3,4,5,6,7,8, 11,12,15,17,19,20,27,29,31,33,34,39,40,42,43,44,45,48,49,51, 52,56,59,61,62,63,69,73,74 と *Hibiscus* に数字が付いている. 欠番もあることから, 図鑑等にある *Hibiscus* の品種一覧などから確認して付けた可能性が高い. フヨウ属は他に *Hibiscus costatus* (区分 O), *H. rosa-sinensis* (区分 J), *H. schizopetalus* (区分 J) などの種類も記録されている.

熱帯地方で年中多くの花を咲かせる常緑低木プルメリ

ア *Plumeria* (キョウチクトウ科プルメリア属) も多く記録されている。本種は花の形態、色等から多くの種類や品種が知られている。郡場寛の研究ノートには 29 種類記録され、そのほとんどは区分 J である。区分 J には *Plumeria acutifolia*, *P. obtusa*, *P. rubra*, などの種まで確認され学名が明示されたものと、*Plumeria* の後に「deep pink, rick pink, large pink, large pink yellow centre, large white, large white oblong leaf, red, small, pink, small foster pink, small pink, small pink orange centre, small white, small white yellow centre, yellow, yellow under pink」等の特徴が書かれているだけの調査植物地点もある。また、*Plumeria* の後に H.S.Tan や G.H. の人名が書かれているものもある。

熱帯性の低木ブーゲンビリア *Bougainvillea* (オシロイバナ科イカダカズラ属) も多く記録されている。本種は花・葉の形態、苞の色等からたくさんの品種が知られている。郡場寛の研究ノートにも調査植物地点別に書かれた種類・品種などをまとめると 36 種にも及ぶ。そのほとんどは区分 B で記録されている。特記されるのは、「*Bougainvillea* Australian seedling 小苗」と実生されていた記録、「*Boug. hybrid*」と hybrid と明示されたものがある。また、調査植物地点毎に *Bougainvillea* と書かれその後「Lady Hudson, Lady Wilson, Lord Carnavon, Lord Willington, Louis Wathen, Mrs. Butt, Mrs. Fraser, Mrs. Lancaster, Mrs. Mc Lean, Maharaja of Mysore × Mrs. Traser」と人名が書かれているものもある。人名はプルメリアにも書かれていた。それらは植物園の職員であるかまたは植物を持ってきた人と思われるが、詳細は不明である。この他に区分 B からブーゲンビリアの基本種と言われている *Bougainvillea glabra* (区分 B,O), *B. spectabilis* (区分 B) も記録されている。

この他に、食材として使われる *Durio zibethinus* ドリアン (区分 D, Y, Z), *Mangifera indica* マンゴー (区分 A, NQ), *Metroxylon sagus* サゴヤシ (区分 A), *Phoenix dactylifera* ナツメヤシ (区分 D) などや、家具材として利用される *Cinnamomum camphora* 樟 (区分 A), *Koompassia malaccensis* ケンパス (区分 O), *Michelia champaca* チャンパカ (区分 F, J, O), *Tectona grandis* チーク (区分 C, NQ) などの有用植物も多く記録されている。

昭南特別市には占領後「昭南神社」が建築された。その建設過程で境内を森林植物園にする計画があり、「市の苗床及び植物園内等より樹木を移植することを建言した。かくて池の中の水百合をも昭南神社前の池に移植し、又種々の樹木の移植をも試みられたのであるが、熱帯植樹法に馴れざる人々のやったためか頗る成績が悪い。」(田中館秀三, 1944) と移植が行われたことが記録されているが、具体的にいつどのような樹種なのかは明らかでなかった。一方、今回の研究ノートに移植の記録が残されている。これによると「昭南神社 27 / IX '04 移

植」と書かれている。04 は皇紀 2604 年の表示である。この記録から昭和 19 (1944) 年 9 月 27 日に、*Dillenia aurea*, *Dryobalanops aromatica*, *Millettia atropurpurea*, *Schoutenia mastersii* など 8 種類の樹木が昭南神社に移植されたことがわかるが、根付いたかどうかの記録はない。研究ノートなどの寄附資料からは他の記録は見いだされなかった。昭南神社の鎮座祭は昭和 18 年 2 月 15 日に行われたが、その時、郡場寛はすでに赴任しており、参列したと思われる。

郡場寛は、昭南植物園の現地職員、人夫にも大変慕われマレー語で「orang yang baik sakali (まことの紳士)」と呼ばれ、職員に大きな希望を与えていた (E.J.H. コーナー, 1982)。戦時中にもかかわらず、敵味方なく植物園の保護運営に一丸となって取組まれたのは、郡場寛のこのような温厚な暖かい人望に寄るところが大きい。

また、郡場寛が 3 年間昭南植物園に勤務したが、昭南島以外での調査等についてはほとんど知られていない。東南アジア等には同様の博物館、植物園などの施設があり、調査等で行き来していた可能性がある。寄附資料の中に 2 通の証明書が含まれている。1 通は治第一六〇二部隊杉野部隊、昭和 18 年 8 月 26 日付けで「コレラ」「ペスト」予防接種証明書で、同月同日に予防接種している。さらに、もう 1 通は「極秘」印のある轉用部隊 (人員) 検疫証明書で「昭和 18 年 8 月 27 日 ジャカルタ乗船地臨時検疫委員会」と書かれ公印が押されている。これらから調査研究のためジャカルタに派遣 (期間不明) されたことがあると推測される。

## 6. 引き揚げと公務復帰

郡場寛は、敗戦当時のことを「8 月 21 日吾々は司令部に集められ・・・万事終わった。それから約 3 週間で昭南島の西南ジュロンのゴム林に大きな仮小屋が二棟出来上がり、市の吏員全部がここに移り、抑留生活に入り、約 4 ヶ月配所の月を眺めた。」(郡場寛, 1955) と述べている。同僚の羽根田弥太と共にジュロン収容所に抑留されていたが、抑留中の状況について知る資料はない。しかし、植物園での研究仲間である E.J.H. Corner 達が「私たちは二人の釈放を要求し、夜は収容所に戻っても、日中は植物園で仕事をしてもらえよう奔走した。・・・二人とも同胞とともに収容所に留まりたい希望だという返事がかえってきた。」更に、英軍司令部にも二人の業績・人柄について手紙にしたため提出している (E.J.H. コーナー, 1982)。しかし、釈放されることはなかった。

昭和 21 (1946) 年 1 月 26 日、郡場寛は引き揚げ船に乗船し昭南特別市を後にした。同年 2 月 9 日に広島県大竹港に入港し日本に無事帰国することができた。帰国してまずは天然痘予防のため種痘 (昭和 21 年 2 月 10 日、大竹検疫所、種痘施行済、第 8207 号) を行い、同月 13 日に帰宅した。引き揚げ時の資料は残されていないが、

桑田義備によると郡場寛の話として「戦争がすんで帰るときは船の中での生活は大変だったらしいです。」(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958)と追想談で述べている。

郡場寛が, 昭和 21 年 2 月 13 日帰洛してのち昭和 23 (1948) 年 8 月 6 日京都大学名誉教授に推挙されるまでの 2 年半の間, 公職に就いた記録はなく, 郡場寛先生遺稿集(同刊行会, 1958)等でも書かれていない。この間のことを知る公文書が寄附資料の中に 2 点ある。

昭和 21 年 5 月 7 日勅令第二百六十三号「昭和二十年勅令第五百四十二号「ポツダム」宣言ノ受諾ニ伴ヒ発スル命令ニ関スル件ニ基ク教職員ノ除去, 就職禁止及復職等ノ件」により京都帝国大学にも教職員の適格審査を行う委員会が設置された。郡場寛も書類を提出し, 昭和 22 (1947) 年 4 月 30 日付けで京都帝国大学理学部教員適格審査委員長名で, 審査の結果この勅令に該当しない旨の判定書(第 127 号)が交付された。

更に, 公職に関して昭和 21 年勅令第 109 号「就職禁止, 退官, 退職等ニ関スル件」で対象範囲が広げられ, 昭和 22 年勅令第 1 号「公職に関する就職禁止, 退官, 退職等に関する勅令」が新たに出された。郡場寛も対象者になった。このため, 調査表を作成し内閣総理大臣に提出した。寄附資料の中に下書きと思われる調査表がある。署名は郡場寛であるが, 上司証明書の署名は京都帝国大学総長とある。昭和 23 年 1 月 16 日付けで内閣総理大臣名で, 審査の結果公職除去に該当しない旨の確認書(第 85641 号)が交付された。

以上の審査が終了し, ようやく公職に就くことが法的にも許され, 昭和 23 年 8 月 6 日京都大学名誉教授となり, 立命館大学, 大谷大学などの講師, そして弘前大学学長などの要職に就いた。この時代, 司政長官の歴任者が名誉教授になることは通常困難と思われる。このことに関して駒井卓によると, E.J.H.Corner (1946) が *Nature* に掲載した昭南植物園での郡場寛の研究者としての業績が高い評価材料となった。「その号を中村(健児)君の好意でみることができまして, 郡場さんを名誉教授に推薦する材料にしたわけです。当時は司政長官などという経歴は名誉教授になるさまたげになったのですが, この記事がそれを解消したのです。」(郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958)と回想している。

## 8. おわりに

郡場寛の昭南植物園に関わる寄附資料の整理と調査を行い, 植物園での調査研究の一端を知ることができた。

郡場寛と共に昭南植物園の保護に取り組んだ E.J.H.Corner によると「彼は戦争に関することは何でも毛嫌いしていた。」(E.J.H.コーナー, 1982)と昭南植物園勤務時代のことを述べている。苦しく辛い時代であった。しかし, 郡場寛が昭南植物園で敵味方なく, 英国人で植物学者の E.J.H.Corner 等と熱帯植物の研究に没頭した 3 ヶ年の日々を振り返り「戦時の昭南植物園に三ヶ年熱帯植物と暮らしたのは, 自分のもっとも幸福な時代であった。」(郡場寛, 1954)と述べている。ちなみに, E.J.H.Corner は, 尊敬して止まない郡場寛の墓参を決意した。1983 年, 77 歳の老体ながら来日し, 青森市内三内霊園に眠る郡場寛の墓前に立った。

## 引用文献

- 太田弘毅, 1978. 南方軍軍政総監部の組織と任務. 東南アジア研究, 16(1): 103 - 118
- 嘉戸一将, 2001. 京都大学と定年制. 京都大学大学文書館だより, 1: 10.
- 郡場寛, 1954. 思い出ずるまま. 弘前大学新聞, 15: 3.
- 郡場寛, 1955. 八月十五日. 陸奥新報, 2878: 1. (1955.8.15)
- 郡場寛, 1957. 閉話有題. 東奥日報, 23544: 4. (1957.11.9)
- Koriba, K. 1958. On the periodicity of tree-growth in the tropics, with reference to the mode of branching, the leaf-fall, and the formation of the resting bud. *Gardens' Bull. Singapore*, 17(1): 11 - 81.
- 郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958. 郡場寛先生遺稿集. 299pp.
- E.J.H.Corner, 1946. Japanese men of science in Malaya during Japanese. *Nature*, 158: 63.
- E.J.H.コーナー, 1982. 思い出の昭南博物館(石井美樹子訳). 208pp. 中央公論社. 東京.
- 芦田譲治, 1943. 理学博士郡場寛の略歴. 植物学雑誌, 57(674): 165 - 166.
- 田中館秀三, 1944. 南方文化施設の接収. 332pp. 時代社.
- 千葉滋男, 1984. E.J.H.コーナー博士の来学に寄せて—その 2. 弘前大学学園だより, 65: 4 - 8.
- 戸川幸夫, 1990. 昭南島物語, 下巻. 323pp. 読売新聞社. 東京
- 中沢潤, 1953. 青森県出身の生物学者(2)郡場寛先生. 進化, 5(2): 18 - 20.
- 山内智, 2009. 植物学者郡場寛博士の履歴. 青森県立郷土館研究紀要, 33: 28 - 34.